



Title	“ゆとり”を生み出す哲学カフェ：鳥取県倉吉市での地域交流の場から
Author(s)	佐藤, 光友
Citation	Communication-Design. 2015, 12, p. 11-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

“ゆとり”を生み出す哲学カフェ ——鳥取県倉吉市での地域交流の場から——

佐藤光友（鳥取短期大学、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Café-philosophique which makes ‘Yutori’:

Reporting from the situation of local exchange in Kurayoshi-City, Tottori

Mitsutomo Sato (Tottori College,
Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

地域住民と学生あるいは教員が哲学カフェという対話する場所に集うことによって、日常的な営みとしての“ゆとり”を再認識できる機会を与えられたのではないかと考える。その意味でも、哲学カフェという地域住民との交流の場から得ることのできる日常生活の振り返りは、専門性に偏りがちな高等教育における教員や学生への反省を促す契機となる。それとともに、地域に密着した哲学カフェの開催によって、地域住民との相互理解を深め、学生の何らかのコミュニケーション能力を向上させるきっかけとなることが期待できるであろう。

キーワード

地域交流、哲学カフェ、ゆとり

Local Exchange, Café-Philosophique, Yutori

1. はじめに

哲学カフェの開催は、今や、日本でも多くの地域で行われている。日ごろ、学生たちにとって、大学以外の場所で、あるテーマに沿って話し合う機会はありません。学生の状況をみると、地域のイベントに参加することはあっても、地域の人々とじっくりと話す機会に恵まれているとは言いがたい。地域住民の方々にとっても、日々の日常生活の中で、若者世代と、ある一定のテーマから議論するといったことは少ないであろう。主催者である論者自身も、自分の専門分野以外で熱く議論を戦わせることはあっても、とにかく研究室にこもりがちである。研究室という洞窟から抜け出て哲学カフェに趣くことは、地域での語らいの重要性を再認識するチャンスとなるのである。

また、哲学カフェというコミュニケーションの場所は、お互いがただ単に意見交換することで終始するものではない。相手が真意として伝えようとしている事柄を粘り強く傾聴する姿勢を学生に培う語らいの場であり、住民と学生相互の関係性が継続的に発展していく可能性を持っている。

主催者は、鳥取県倉吉市の地を、地域の住民と学生との交流の場として選び、そこで哲学カフェの開催を計画した。

今回〔2014年9月〕の哲学カフェに集った計9名は、市民4名、学生2名、大学教員3名という構成であった。哲学カフェのファシリテーター（進行役）を論者が担当した。ちなみに、哲学カフェのテーマ「〈ゆとり〉って何？」は、長らく佐世保の地で哲学カフェを開催していた川瀬雅也氏から提供していただいたものである。

“ゆとり”についての議論は3時間に及んだため、テープ起こしをした発言を編集し、休憩前の80分間を第一部、休憩後を第二部として整理した。以下、実践記録（紙面の上限により、部分的に削除しているところがある）を垣間見ることから、“ゆとり”についての会話の進行をたどることで、“ゆとり”とは何であるのかについて考えを深めてみたい。

2. てつがくカフェ 記録をもとに

2.1 開始前

哲学カフェ（みなさんには「哲学」という漢字ではなく、「てつがく」という平仮名で明記したチラシやポスターを配っていた）の進行は、まず、カフェを開催するにあたり、山陰地域、特に、鳥取県倉吉市で、記憶の限りでは、哲学カフェが初めて催されることと、この哲学カフェの開催は、地域の住民あるいは市民と学生との交流を話し合う中で深めてもらおうとしたものであることを説明した。そして、そもそも、哲学カフェというものが、20年ほど前にフランスではじまり、高尚な哲学的議論ではなく、たまたまカフェに集う人たちの中に哲学者がいて、それが深みのある議論へと展開したこと、そう呼ばれるようになったことをファシリテーターが解説をして、哲学カフェの幕は切って落とされた。その後、哲学カフェを行う前の確認事として、単なるおしゃべりの場ではなく、進行役がいて行われるものであることと、「人の話は最後まで聞こう」、「ここでは立場を忘れて」といったルールが確認された。それから、佐藤が、今回のテーマ「〈ゆとり〉って何？」ということについてのコメントを読み上げ、議論の取っ掛かりとした。読み上げられた文章は以下に示している。

「〈ゆとり〉って何？」

教育の世界は「ゆとり」に揺れています。「詰め込みすぎ」と言われ始まった「ゆとり教育」が、今度は「学力低下」ということで廃止になりました。ゆとりのある教育は、学力向上につながらないのでしょうか？ 社会も同じことです。現代社会では成果ばかりが求められ、ゆとりのない社会だと言われますが、やはり、ゆとりと成果は結びつかないのでしょうか。

そもそも「ゆとり」とは何でしょう。暇、退屈、余裕、遊びなど似た言葉はありますが、

「ゆとり」には独特のニュアンスがあるように思います。「現代社会は〈ゆとり〉を失った」と言う時、具体的には、私たちは何を失ったのでしょうか。「ゆとり」を回復するにはどうすればいいのでしょうか。「ゆとり」を得ることで、私たちは何を得て、また、何を失うのでしょうか？

答への望めそうにないこんなテーマについて、みなさんでつらつらと話しあってみましょう。「ゆとり」をもって…。

以上

2.2 第一部

詰め込み教育に対する対義語としての“ゆとり”からスタート。話は、ゆとり教育から日常的な、ふとした空き時間で感じる“ゆとり”など当初参加者が思い描いていた“ゆとり”の考えが展開されていく。最初はぎこちなく発言は控えめであったが、次第に熱弁が繰り広げられるようになった。

Aさん：僕が認識している“ゆとり”というのは、詰め込み教育に対する対義語としての“ゆとり”という意味を真っ先に思い浮かべます。でも、結局、“ゆとり”って学力に変換されるものなのか疑問に思うし、単純にこれをはずして考えてみれば、学生でない身分から考えると時間的な余裕なのか、社会人にとっては、時間的な余裕ってなんだろうと考えると、ちょっと難しくなるなと思う。

Bさん：もともと、ゆとり教育と言ったときに、おそらく学力が下がることは予想されてなかったと思います。もっといえば、学力が低下してきたのは、時代の流れや社会全体に価値観が多様化していった風潮、子どもたちがあまり勉強ばかりではなくて、もっといろんなことをするようになって学力が低下したのかもしれないですし、学力が低下したって、直接は結びつかないんじゃないかなと思うんです。“ゆとり”ってというのは、誰もが大事なことだなというのは感じている。できれば“ゆとり”がある生活、人生にしたいと思うけれども、なかなか“ゆとり”って何と真正面から考えると難しいと思います。今日も来るときに“ゆとり”ってなんだろうと考えながら来ました。類義語の余裕だとか暇だとかありますが、それとはまたちょっと違うのかなと思います。

Cさん：私いま、車で通っています。ずっと、車で通っていましたが、仕事場がかわって。そこで“ゆとり”に気づきました。汽車で通う、バスで通うというのは、完全にあなたの任せの時間の中に身を置くことになるんですね。…その時間をただ、ぼーっとしているんですが、そうして見えてきたことが、すごく嬉しい。朝、緑の庭園が見えるんですね。毎日そこを通っていたのに、車を運転しているときには少しも見えなかった。見ていたんだろうけれども見ていなかった自分に気づいて、すごく嬉しいし、それがすごくいい時間に思え

る。でも周りの高校生たちは大抵携帯で何かしている。なんで景色を見たり楽しまないのか、なぜその時間まで何かをしないといけないと自分を焦らせるのか、と思えてきて。つかの間の時間も何かに駆り立てられる生き方をして、何かをしていない時間を罪惡のように思い始めているんじゃないでしょうか。何もしていない時間の方がものすごく意味がある。それが、私の“ゆとり”の定義といえば定義です。

“ゆとり”って時間的な余裕のことなのか、それとも、何もしない時間を楽しいと感じる心の余裕のことなのだろうか、参加者の具体的な経験や感情をもとに“ゆとり”の考え方が語られた。ここで、“ゆとり”とは楽しいもの、幸せにつながるものなのか、それとも、罪惡や恐怖、悪いものなのか、という疑問が提示され、議論は“ゆとり”の感じ方へと展開されていく。

Aさん：僕は罪惡っていうのは、人間って二通りあって、“ゆとり”って一つのものだと思っています。でも、個人と社会という側面があって、個人が個人として完結しても構わないんですけども、社会的には、最終的には何かに変換されないと結局だめなんじゃないかと考えている。これは“ゆとり”が学力だったり、お金だったり、何かしらに繋がってないとだめなんだよって社会は見ると思うんですよ。

Dさん：本当は“ゆとり”を私もいっぱい持っていますけど、家で寝ていたら、ただの怠けものとしか見てくれないし、結果をつくらんと人って評価してくれないから。「あ、この人って怠けものだ」とか思われるだけなので、そこで自分が苦しくなったら罪惡感を覚えるというか、それでも「私は平気ですよ」と言える人かどうか。それって、ハワイのビーチとかだったら、日光浴しながら本読んでいても私は平気よと言ってられるけれども、日本のそのへんの白兔海岸でそうしてたら、「ばっかじゃないのあの人」という人がいるし、その違いだと思います。

Aさん：何かに変換しなければダメなんだっていうことが悪いことのように言っちゃったかもしれないですけど、本当に時間的にも余裕があって、本当にリフレッシュしていると、これも悪いように受け取られることがある。労働の生産力が上がるというふうに、結局は、ずうっと“ゆとり”という場面ではない。ある程度管理されているから“ゆとり”を感じられるのであって、“ゆとり”だけだったら“ゆとり”は感じられないですよ。外国がいつている“ゆとり”と、日本人がいつている“ゆとり”の違いっていうのは、生活様式や文化的なものであって、日本人が感じているのは、忙しいなかの“ゆとり”であって、外国の方がいつているのは、単なる計画的な様態のような気がします。たぶん、違うんだなあという気がします。同じものではないような気がします。

Eさん：私ね、こういうところへこれるのも、“ゆとり”だと思って。ここへ来るためにい

ろんなことをやって、私“ゆとり”っていうのはね幸せだと思っています。

佐藤：“ゆとり”っていう言葉自身はあまりネガティブな意味合いがないのではないかな。それが日本にいる私たちのなんかあの、暇っていうとすごくネガティブな意味合いがあるのではないかな。今暇やねんという時間的には余裕があるはずなんだけれども、暇やったら何かしなければいけない、さっきの労働観みたいなんですよ。ね。“ゆとり”と暇というのをどう捉えているのか。

Bさん：先ほど車に乗ってくるときに、“ゆとり”ってなんだろうと考えながら来たと言いましたけど、たまたま信号があって、子どもが横断歩道を渡っていきました。子どもって車の状況もあんまり見ずに、さあっと渡るんですけどね。あれは“ゆとり”がないなあと思ったんです。大人になると、青信号だな、車の音がするしない、ここは車通が多い、少ないとか、そういう全体の状況がわかるから“ゆとり”を持って横断歩道を渡ると思うんですね。“ゆとり”っていうのは、いろんなことがわかっている状態、自分の状況がわかっている状態に生まれるもので、反対に言えば、“ゆとり”がないのは、わからなかったり、自分の視野が狭かったりするときに、“ゆとり”がないんじゃないかなあっていうことを思いました。今、暇と“ゆとり”っていうことで出てきたんですけども、暇っていうのは、何もしないことかなあと思っています。“ゆとり”っていうのは、何かをしながら、ちょっと隙間というか余裕といいますかがあるという状態。自分が何かするときには100%力を出し切るのではなくて、80%ぐらいで何かすることを指すのかなあ、と今思ったりしています。それで“ゆとり”っていうのは、私が思うのはプラスイメージがほとんどかなあと思います。暇っていうのは、マイナスイメージもあったり、プラスの場合も、肯定的に捉える場合ももちろんあるかなあと思います。

Aさん：暇っていうのは、外的要因、自分の外的な要因を捉えているのだと思うし、“ゆとり”っていうのは、自分の内面的な言葉を含んでいるものだと思う。暇っていうのは、何とすることがない状態なんで、“ゆとり”っていうのは、何かしてても、自分の内面的な部分に対して持っているものではないかなあというふうには思います。

Bさん：（Eさんに向かって）先ほど、午前中にすべて片付けてこられたと言っていましたね。

Eさん：今日に向かって、今日絶対やらなきゃいけないことがあったのでいろいろと、それを昨日したり、朝早くちょっと片付けたりして、絶対ここに来たいと思ったんですね。私はね、二人の親が介護とかで時間的に“ゆとり”もなかったんです。病人のお世話とかいろいろで、身体も壊して、しまいには主人も亡くして、そういうときに、こういう講座とかを見つけて、私行きたいと思ってそれに向かって何が何でも時間を作っちゃうんですね。また行って幸せだと思うし、お金のことだって、こうやって暮らしていけるというのも“ゆとり”があって幸せと思うし、暇という似たようでちょっと違うと思うんです。周囲の人は、暇があるからそういうことができるのか、という人もおられるけど、暇をつくらなきゃ

あ、できないときもあるんですよ。

Cさん：暇って結局イコール時間があるということなんですか。

Eさん：だけど、何もしていない人のことを言っとんなることもあるんです。そういうことを言う人というのは、何か仕事をしておられる農家の方とか。

佐藤：暇っていうのは、退屈な時間ってということですよ。

Cさん：退屈っていう言葉もあまりいい印象がない言葉ですよ。でも、退屈するって、けっこう、どっかこう、精神的にほっとするっていう何かそんな感じもありますよね。

佐藤：すみません。ここでちょっと哲学者の話をしますけれども、ハイデガーという哲学者は、退屈な状態のときでないと、人間の本来の状態が見えてこないというようなことを言っています。

Cさん：退屈ね。私の職場の出勤は9時なんですけれど、8時15分くらいになるんです。その40分間に本を持って行って、図書館の近くなので本を読んでいるんですが、ぼおっとしているときもあるんです。本を読むのも面倒くさくて、でも退屈はしてないんですよ。じゃあ、退屈ってどういうふうにするのか。全然退屈じゃないんです。ぼおっという日差しだなあとか、風が気持ちいいとかしているその時間帯もそれはそれで十分満足しているんですね。じゃあ、退屈ってどういう時間になるんでしょうか。

Aさん：僕は先生がいる前でなんですけれども、おもしろくない授業は退屈です。

Cさん：ああ、言える（笑）ハイハイ。無駄な時間を過ごしているという気分よね。

佐藤：われわれには、耳が痛い。

対話が進むにつれて、参加者同士で自然に会話が交わされるようになった。“ゆとり”や暇、それを感じる状態が、参加者の率直な言葉で語られていき、前半が終了となった。

2.3 第二部

休憩後、まず前半での議論の内容を整理し、ポイントを掻い摘んで説明。その後、佐藤が“ゆとり”の定義づけをするように議論を収束させていくか、もっと多様な“ゆとり”について考えを出していくのか、議論の方向性について提案があった。「まだまとめられる状態にない」という参加者の発言があり、多様な“ゆとり”について語り合う議論が再開された。後半から参加したFさんが口火を切ってスタートする。

Fさん：実は、あの二、三日前だか、アジア大会とかあった。吉田沙織とか錦織とかあの人たちは、ゆとり世代に育った人だそうです。そういう人が、ゆとり世代に育ったために学力が低下して、最近では小学生だと夏休みの少し前から授業をはじめるとか、ゆとり教育をしようというのが失敗だったような感じの発言もあるけれども、一方、ゆとり世代に育った人

たちで、案外、伸び伸びといろんなところで世界一とか、いろんなことをやる人が多いというのをテレビで言っていて、そういうもんかなあと私思いました。

Aさん：ゆとり教育世代の特徴として、個性を大事にしているというのがあって、個性的な人たちがたくさん出てきているとは思う。ある種それはいいことでもあるけれども、反面、全部はいいことになってないような気もするんです。というのは、教育、子どもたちの親というものの価値観が多様化したのもありますし、育て方が変わったというのも大きな要因だと思うんですけど、それによって、家庭で育てる部分というのが、比重が多くなった面もあると思うんです。知り合いの子どもが小学生なんですけれども、ちょっと、学級崩壊のような状態になっている。とにかく、授業が全然進まない。それで先生も何もしなくなった。学校じゃあ全然勉強にならないから、家での勉強に賭けようということになって、お金のいるところは塾に行かせる、とすると、もう、家がお金を持っているかいないかによって学力が二分することになりますね。やっぱり、教育っていう面だけでみればいい面と悪い面と、集団教育や公教育って、悪い面もあるけど、確かにいい面もあったと思う。それはある種の日本人の特徴でもあったと思いますし、でもこれは外国からみたらだめなところもある、これは文化の差異で、どっちが絶対いいとか絶対悪いとかないはずなんですけど、ある種グローバルスタンダードという感じでみられるというのも、ちょっとおかしい話ではあるなと思う。水やらなきゃ花なんか育たないし、放っておけば育つのかなというところとちょっと違和感があります。難しいのは、社会と学校と家庭、子どもを育てる環境が、以前のようなものではなくなったときに、どこで育てるんだというのが変わってきたかなというのは確かにある。

Fさん：おそらく、その日本の教育システムと今言われたことがあると思うんですね。教育のやり方がいままで通りのやり方だと、今言われるような放ったらかしになる可能性はありますよね。

Aさん：そうですね。社会と家庭と学校の全部が変わっていったら、価値観や社会全体が変化しているのに、やる方がずっと同じでいこうっていうところに、何か矛盾している。弊害として子どもたちに絶対おかしい部分が出てきているはずだと見ていて、何か絶対悪いとは思わないんですけど、学校って、公教育って、ある種何か一律のやり方みたいな、モデルみたいなものがある。個性的な人って学校ではつくれるものなのか、家庭なのかっていう。

FさんとAさんを中心にゆとり教育についての議論が展開されていき、進行役が若干やきもきする中、Aさんが“ゆとり”について議論を戻していく。

Aさん：ゆとり教育と、個人がもつ“ゆとり”とはやっぱり違う。個人として考えれば、僕としては、“ゆとり”って、幸福を感じるべきときであったり、意味づけができるかということだと思うんです。先ほど言われた「ここに来るために頑張ってここに来た」というのは、お

そらく、「やらなければならないこと」と、「やりたいこと」というのはまったく別で、やりたいことを自分で選べるということが一種の幸福みたいなものだと思う。周りからの圧力で仕方なくやっているという状態で、でも自分から選べるんだったら、これは幸福だし、時間的なものがなくても幸福に感じる、忙しくても、でも、幸福に感じるっていう面では、“ゆとり” っていうのは、これに対して意味づけができるかということだと思うんです。例えば、学校だったら学生という役割を演じなければならぬし、社会人だったら、サラリーマンだったり、県警だったりして、周りからの関係性の中で役割を与えられて、やらなければならないことも当然持っているけれども、これを社会の役割を全部はがしたときに、立ち止まったときに、自分ってなんだろうって、自分は何のために生きているんだろうって考えたときにちゃんとこれを意味が与えられるかっていうところは、“ゆとり” かなって自分では思っているんですけど。

Cさん：さっき、Dさんがね。何にもしてないっていうことがわりとこの日本の社会ではいい目で見られないとおっしゃって、私も多分、近所にそういう人がいたら、何やっているんだろう、どうやって食べてんの、みたいな感じで多分見るだろうと思うんですね。で、日本の社会で多分、そうやっていく人っていうのは多分ものすごく自分の意志の強さを持ってないと生きていけないだろうなあ、社会での目は“ゆとり” がないというか、許容範囲が狭いんだろうなあと思ったときに、やっぱりそれができる人っていうのは、社会がどう認めたって、自分の強い意志を持っている人なんだって思います。

Dさん：私は、昔から、ちょっと人と外れていると思われる方で、よく言えば、個性的、外国の人からも個性的ねって言われるんです。私は自分で何か変わったことをしている気持ちはまったくないんです。だけど、受ける印象がどうも個性的らしくって。でも、私は、学校で別に、あなたは個性的になりなさいと言われて育てられたわけじゃないし、家でも個性的になりなさいと育てられたわけでもないし、ただ、自分がしたいことをしていたら、思っていることを言ったらそうになっているんです。だから、さっき言っていたけど、個性的な人を育てるのは、家なのか社会なのかではなく、持っているものなんです。私から見たら。もう生まれたときに持っているもの、そういう気質であって、それだけのこと。だから、ただしたいことをしとったら人とズレとるって、変わり者だって言われたらショックを受けるし、個性的だねって言われたら、ちょっと嬉しいし、これだけの違いって感じ。

Cさん：わかります。私もほんと小学校のころから、M子っていう名前なんですけど、Mちゃんは変わってるって言われ続けて育ったから、もう変わってるって言われることに少し慣れっこなんですけれど、でも、何だろう。多様性っていうかね、そういうものももう少し、許容範囲が広くって認めてくれる社会ならやっぱり、もう少し、日本の教育も多分戻れば変わってくるよなあとは思っていますよね。

ゆとり教育や社会制度についての話を交えながら、個人と社会のあり方について話が広がっていった。参加者は、真摯に耳を傾けながら言葉を重ねていく。

Cさん：社会の中で生きるというのは、ある程度何かの基準に合わせないといけないのは当然のことですね。それからはみ出したものがやっぱり、ある意味バツやサンカク付けられるのもしかたのないことで、学校なら学校の規則がある。けども、そこに社会的な余裕というものがあって、それだけじゃないんだよなあって、なんか少しずつ少しずつちょっと変わってきているようには思うんですね。日本の社会も。

佐藤：それは余裕がでてきたということですか。

Cさん：そうです。そんなにたくさんにはいっぺんには変わらないけれども。現に、例えば、性的マイノリティーっていうんですか、ああいう人たちもちょっとずつ認められて、ちょっとずつ変わるんじゃないかっていう兆しがある気がしている。それは、ある意味では、日本人が一生懸命みんなで働いて築き上げてきた今があって、経済的な余裕というものをここまでもってきたから、やっと周りが見えるんじゃないかとは思うんですね。やっぱり安定している国にいるということから、やっと、じゃあ、ゆとりって何って、自分が思えるわけで、本当にそういう意味では、ある程度確立されたものがある中に合わせなきゃいけないのは、仕方ないと思うんです。そこから、でも、四角い中におんなじ形にいることだけ求めるような社会を作っちゃったら、これからの子どもたちたいへんだし、私たち違うんだよっていうことを子どもたちに繋げていかないといけないんじゃないかな、って思うんですよね。人のせいにしないで、それぞれが自分の生き方の中で、ちょっとずつ周りを見れるとか、そういう余裕のある人間になって子どもたちに繋げていきたいなあと思います。

Bさん：日本は変わってきてますよね。

Cさん：変わってきてますよ。

Bさん：余裕、ゆとりが少しずつできてきてるかなあと思います。まさに、哲学カフェが倉吉で行われるってことも、余裕ですよね。

後半の哲学カフェの議論ではこの流れも予想していたものではなく、ある一定の結論を出さなければならないとか、一定の方向に向かわなければならないものでもなく、むしろ、どの方向に進むかわからないところに哲学カフェのおもしろみがあるとも言える。ただし、縦横無尽に議論が進むことが必ずしもよいのではなく、ファシリテーター（佐藤）の一定のかじ取りが大切であることは言うまでもない。後半での議論は60分、そして、最後に今回の哲学カフェに参加した感想や意見を伺って幕が閉じられた。

2.4 感想

Eさん：あまり話さなかったですけど。私はとにかくここへ来て幸せでした。“ゆとり”っていろいろあるけども、いろんな面でやっぱり幸せに繋がると私は自分で体験しています。今日はありがとうございます。

Bさん：“ゆとり”ってやっぱり、いい言葉じゃないかなと思います。“ゆとり”があった方がいいし、そのためには何かやらなきゃいけないことは、やる。そして、時間をつくる。そういった少しやらなきゃいけないことがあって、で、少し何もない、このバランスっていうんですかねえ。何対何が適切なかはわからないですけども、そういうメリハリっていうか、そういうことが大事なんじゃないかなって思いました。今日は、こういう場所があって、いろんな方のお話が聞けてとても充実したいい“ゆとり”のある時間を持てたと思います。ありがとうございました。

Cさん：私は本当にこんな話を、何かこう盛り上がる時間というのは、ほんとにそういう出会いもなく、とても楽しかったです。最初この哲学カフェって、図書館のロビーで見ました。哲学っていう感じで正直、関係ないかなあと実は思っていたんですけど、何となくちょっとすごい真面目なこと話すの面白いかなあ、どんな人たちが来るんだろうと思って来ました。多分、この哲学カフェっていう名前、とっつきにくいので、何とかのしゃべり場みたいな方がもう少し、いろんな人が来なるんじゃないかなあと思わないではないです。もっとたくさんの人に出会えたらもっと楽しい意見が聞けると思います。今日はありがとうございます。

Aさん：今日は議論させていただいて、ホント楽しかったです。僕個人の“ゆとり”に対する考えというのは、すごく理想的に考える気があるので、個人の持つ自由度だと思うんですよね。内面的にも物理的にも時間的にも個人が持つ自由度っていうのが、“ゆとり”なんだと思うんです。個人というのは、家族や友だちだったり、集団、地域、会社、学校、社会というあらゆるものに属していて、あらゆる制約を受けている。その中でも全部個人が振るっているのではなくて、その中でも個人の持ちうる自由度っていうのが、“ゆとり”なんだと思うんですけど、ただ、それはもう頭の中で考えている僕の“ゆとり”なんで、Eさんが「今幸せです」といったときに、すごく実感を持って言われたんで、あっ！自分の言葉は実感がないことということを感じて、Eさんの言葉、すごくいいなって、ちょっと、素直に感じてしまいました。ありがとうございます。

Fさん：みなさんと“ゆとり”というテーマでディスカッションして意思交流ができ単調な毎日の中、いい刺激になりまして、とっても、ためになっていい時間でした。

Gさん：“ゆとり”って何っていうのがテーマのようですが、いろんなことがあると思うんですよ。精神的なこともあれば、経済的なこともある。ただ、その“ゆとり”っていうものを本当にそれを創出しようと思ったら、グローバルに変わらないと、学力だけとか、何だけ

では無理で、全体的にこう変わらないとうまくいかないんだろうなと思いました。

Dさん：私にとっては、自分が自分のまんまでいてもいいよっていう範囲が“ゆとり”っていう感じがあって、何かあんまり、社会がどうかっていう大きなことじゃなくて、何か自分が普通に毎日楽しいなあって思える程度に生きていける範囲が“ゆとり”の範囲みたいな、半径何メートルというか、何かそんな感じの空間っていうか、だから、人と人との関係性とか、何かそういう範囲とかで、あっ、この人といっしょにいたら楽しいなあとと思ったらそれがその人とその人との自分の“ゆとり”の範囲みたいな、何かまあ、毎日楽しいなあと思えたら、“ゆとり”がある生活かなあって感じです。

3. おわりに

まず、反省点としては、決してよい進行役ではなかったことは、記録からも読み取れるであろう。自らの欠点でもあるが、やはり、どこか日常的な事柄から離れて、形而上学的な思考で解釈しようとする傾向が自らにあったことは反省すべき点である。次回、進行役になったときは、みなさんの共通理解が得られる日常的な出来事や場面、日常会話などから話をつなげていかなければならないと感じている。

「“ゆとり”を生み出す哲学カフェ」というタイトルのヒントになったのは、Eさんの一言であった。それは、今回の哲学カフェのテーマ「〈ゆとり〉って何？」についての会話が始まって、しばらく時間が経って、Eさんが「私ね、こういうところへ来れるのも、“ゆとり”だと思って。ここへ来るためにいろんなことをやって、私、“ゆとり”っていうのはね、幸せだと思っています」と初めて語られたその言葉であった。そのことがとても印象的であり、その場のカフェの雰囲気を一変させるほどであった。Eさんは「今日（哲学カフェ開催の日）に向かって、今日絶対やらなきゃいけないことがあったのでいろいろと、それを昨日したり、朝早くちょっと片づけたりして、絶対ここに来たいと思ったんですね…。私行きたいと思ってそれに向かって何が何でも時間を作っちゃうんですね。また行って、幸せだと思ひ…」このとき、“ゆとり”というものは、必ずしも余裕があるから出てくるものではないということを改めてこのEさんから教わったような気がする。何か“ゆとり”を感じさせ、幸せな気分になりたい、そのためには時間を作ろう、そのやる気やインセンティブのようなものが自らを突き動かす大切な感情であったということ、このことに今更ながら気づかされたのである。

今年度も残りのカフェの時間もみなさんと真剣に議論し、楽しく過ごすことが、余裕の証であり、地域における哲学カフェの継続と発展を促す原動力（エネルギー）なのである。